



## 卓 話

### 「勝つ人生負ける人生」

野球ジャーナリスト 佐藤 安弘氏

11月11日、読売巨人軍は、渡辺恒雄球団会長(87)、滝鼻卓雄オーナー(69)が、原辰徳監督(50)と話し合い、来季から3年契約を結んだ。第二次原巨人軍は、6年間ということになる。02, 03年の1次を加えると通算8年となり、師と仰ぐ故藤田元司監督の7年を上回る。年俸は約1億6千万円?



原監督は、さらに来年のWBC監督も指揮を執る。ワンマンであるナベツネさんに、何をいわれても、ただただ、従順に従い、サラリーマンの模範となるような生き方?で、栄光の座を死守している。大したものなのだが、なんとなくスッキリしないのは、私だけの感情だろうか。

9日に終わった2008年の日本シリーズは、戦力劣勢の西武が4勝3敗で逆転勝ちした。渡辺久信監督は昭和40年8月2日生まれの43歳。12球団最年少監督である。翌日の日刊ゲンダイでは「WBC日本一渡辺監督でやれ。短期決戦、原じゃムリだ!」の大見出し。さらに「スターなきチームを日本一に仕上げ、なお自らを謙虚に“ダメ監督”といい、選手を称える凄い能力と魅力」と渡辺監督をべた褒めだった。

さて前段が長くなってしまったが、本題に入ろう。WBC監督選出の慌てふためきぶりは見るに見かねる醜態であった。どこにも書かれなかったし、テレビでも一言も語られなかったかったので、不肖私が真相を語らせて頂く。混乱の元凶は、加藤良三コミッショナーと王貞治さんである。2008年WBC日本監督は、五輪監督と込みで星野仙一に決まっていた。それが、思いもよらなかった北京での惨敗。「リベンジするのがおれの生き方だ」といきがる星野仙一に日本国民が予想外の強い拒否反応を示した。それでも球界のボス渡辺恒雄さんが約束通り、星野で行くよう内々に命じた。

私は、この時点で、渡辺恒雄さんの老害ぶりには

本当に困ったものだと、またもや、呆れ果てていた。ポピュリズムになる必要はないが、世間の常識というものも見逃してはいけない。北京五輪の星野ジャパンの負けっぷりは、あまりにも酷く、指揮官星野は全責任を負わなければ、野球ファンは納得をしなかったろう。それしかない。監督の人材なんていくらでもいる。

王貞治(68)は2006年のWBCで世界一になった。信頼は厚いが、失礼だが、勝負師としての運は尽き果てていることを見逃してはいけない。この5年間、優勝がない上に、今年などは、あの楽天・野村克也(73)にも負けて、最下位に終わっている。長嶋茂雄(72)も脳梗塞で無念の涙を飲んでいる。王も昨年、胃癌で胃を全摘出で、プロスポーツ人としては、自ら舞台から降りなければならない世の定めだ。それが超一流人の引き際というものではないか。

みっともないことには、海の向こうから、イチローが「選手だって命がけで立ち向かうのに、監督は現役では難しいでは、筋が通りません。おかしいですよ」WBC監督選出についてクレームをつけてきた。「なるほど、イチローの言うことももっともだ」王貞治は即座に現役監督でよいと急変した。そんな馬鹿なことがあっていいものか。一選手の発言くらいで、監督人事をぐるりと変えるよう体制検討会議とはなんだったのだろう。いい加減さが浮き彫りになってしまった。

では原でいきましょう。13ゲームの阪神に逆転優勝したのだから、資格はないとは言わないが、まだ日本シリーズが残っている段階で、なぜ急ぐ必要があったのか。それなら、誰もが納得がいくように、日本一監督がWBCの指揮を執るようにすればいいだけのことだ。1週間待っても何の支障もない。読売ナベツネさんの存在は、どんどんプロ野球ファンを失っている。年寄りが引き際を渋っている姿ほどみっともないことはない。それらを含めて、最後に私の講演でよく話す言葉を並べておこう。

- ★「複雑なことは単純に処すべし」
- ★「出所進退。進むは他人なり。退くは己なり」
- ★「本物か偽者かは逆境の時にわかる」
- ★「傲慢は他人を不愉快にする」